

英語と辞書と友達と…



岡本真由美

高校生の時、通学には片道で2時間かかった。長い電車通学の間は、ぼうっと考え事をするか、読書の時間だった。中でも、辞書をよく読んだ。当時、英語の参考書があまり好きではなかった私は（説明が少なく、問答無用、とにかく覚えろと言われているようで）、辞書を持ち歩いていることが多かったためだ。電車で揺られ、暇にまかせて授業や問題集で気になった語をちらちらと見てみると、その語の出身（語源）や性格（語義）や振る舞い（用例）から「人となり」のようなものが見えるようで、英和辞書は英単語の履歴書のようなものだと思っていた。

そんな辞書は、私の英語学習の最大の拠りどころであった。どこで聞いたのか見たのか忘れてしまったが、誰かの「英語は辞書と心中するつもりで勉強しろ」という言葉をいたく気に入ったこともあり、高校英語の勉強では、とにかく辞書に頼った。何度も何度も引いているうちに、辞書の下半分が膨れ上がってくると鼻膨らむ心持ちになり、前にマーカーを引いた語を再度引いた時は、覚えられない自分に腹を立てた。最後の解説に収められていた名詞の種類や冠詞、文型などの説明は難しかったが、こむずかしい説明を解明するのはちょっと面白かった。

■ *Women in Love*

高校3年生の頃、大学生のお姉さんが英語の家庭教師に来てくれて、ゼミで読んでいたというD. H. Lawrenceの*Women in Love*を一緒に読むことになった。マニキュアが綺麗な人差し指と中指でしゃら・しゃらとページをめくる様子は、親

指と人差し指でバサ・バサと千切れんばかりにめくる私には、とても優雅でかっこよく見えたし、「学校の勉強」のためでなく辞書を使うということに、不思議な感じがしたのを覚えている。

*Women in Love*の最初のページを開いたとたんに、“... their thoughts strayed through their minds”のような表現があり、辞書を引いても該当する訳がわからなかった。読み進められるか心配だと言うと、「大丈夫。辞書を引いて、ここでの意味を想像してみましょう。」と言われた。辞書がくれる意味のヒントで、本に書かれた世界を想像し、「あなたならここをどんな訳にする？」と訊かれるのは楽しく、そして嬉しかった。これまでとは違う、この自由な辞書との関わりは、辞書は正しい日本語訳を教えてくれる教師というよりも、理解や表現のためのヒントを私に与えてくれる助言者のように思わせてくれた。

■ I shall ...

また、辞書は、私が教材以外の英語に出会ったときの拠りどころでもあった。私のいた高校は、当時ではまだ珍しかった帰国子女を多く受け入れていて、私のクラスにも、アメリカやイギリスで10年近くを過ごしたクラスメートがいた。いつもはキャピキャピと女子高生らしい話でじゃれあっていたが、時に彼女たちを通して英語の実際に遭遇することがあった。

ある日、アメリカからの帰国子女Aが、「I shallなんて、この時代言う人いる？ いまどきShakespeareじゃあるまいし。」という、イギリスからの帰国子女Bが、「え、使うでしょう。」

I shall go there ...とか。」と反論したら、Aは「女王様みたい。Britishだねえ。」と返した。そんなに違いがあるのかと辞書で shall を引くと、「shall が用いられなくなってきた地域があって、この辞典ではその代表として〔米〕をあげたが…」とあり、目の前で辞書の記述が証明されていることに驚いた。また、ある時には、「それでいいよ」を、Aは “It’s OK.”、Bは “It’s all right.” と言うので、調べてみると OK はもともと米語だったと書いてあって、英語と米語の違いは本当にあるんだなと、しみじみ納得した。

■ of と off は兄弟

しかし、時には辞書が頼りにならないこともあった。ある休日、前段の友人たちと過ごしていたとき、帰国子女 A が左胸に “Hands off!” と書かれた T シャツを着ていた。どういう意味？と尋ねたら、胸に当てた手をぱっと離して、「手を… 触れるな！って意味だよ。」と言った。なるほど、off は離れるという意味か、「じゃあ、Hands on! だったら触れ!？」とみんなで笑っていたら、帰国子女 B が、「“hands on” って、実際に触れたり、実地でする経験とかを言うんだよ。」と教えてくれた。そういえば off なんて前置詞をわざわざ辞書で調べたことなかったなと、家に帰ってから引いてみたら、off の最初の語義に「離れて」とちゃんとあり、その後も、ある物事から離れたり逸れたりという語義がずらりとあって、off の「人となり」がわかる気がした。ふと、ひとつ前の見出し語 of に目をやると、最初の「…の」という「繋がった」感じの語義に続いて、どちらかという正反対の「離れて」に近い意味があり、最後に「元来は off に対する弱形」と書かれていた。もしかすると of と off は兄弟で、だから「離れて」という似た意味を持っているのかと想像し、思いがけない発見をした気がしてワクワクした。それ以来、辞書で語を調べると、その周辺に兄弟はいないかと、ちらりと見るのが習慣になった。一方、その日帰国子女 B が教えてく

れた “hands on” に関しては、その時は辞書を調べても記載が無かった。友人から聞いたぼんやりした輪郭 (definition) だけが頭に残り、辞書で確認してスッキリしたいのにと少し恨めしい気持ちがあったことを覚えている。

恨めしいと言えば、こんなこともあった。高校生の頃、詩を書くことが好きだった私はちょっと頑張って、英語でも書いてみた。人間愛をテーマにして、愛を作るレシピというコンセプトで書いた詩だった。前段の帰国子女 A や B も読ませてというので見せたら、途端にお腹を抱えて笑いだした。確かに構成はレシピに見立てて面白くはしたが、人間愛というちょっと崇高なテーマのはずなのに、どうして？と訊くと、そのタイトルがおかしいということだ。タイトルの “How to make love” は、どの単語も問題無いように思え、なぜそんなに笑うのかと私は狼狽するばかりだった。ふたりの笑いが収まってようやく、make love の意味を教えてもらって、恥ずかしさに真っ赤になった。あとで辞書を引くと、当時の辞書には「くどく、言い寄る」という意味があるだけで、これじゃあ使っちゃダメって分かんないよ、と詩人志望の多感な女子高生は泣きなくなった。

■汗も恥もかきながら

高校の頃のエピソードを思い出しながらここまで書いてきて、手元の『ジーニアス英和辞典』や『アクシスジーニアス英和辞典』で前述の語たちを調べてみた。どちらの辞書にも、shall は「英米とも shall は古風で…」とある。off は離れるイメージが図解してある。hands-on は「現場での、実地の」という意味で見出し語があったし、make love にはちゃんと「セックスする、愛をささやく」のような記述があった。辞書は確実に成長している。汗も恥もかきながらも、重い辞書をもって通学していた高校生の私（もう40年以上も前だけど）がまた思い出された。心中するならこんな辞書にしたら、とあの頃の私に見せてあげたい。

(おかもと まゆみ・関西大学教授)